

戦略的創造研究推進事業
(社会技術研究開発)
令和元(2019)年度研究開発実施報告書

「安全な暮らしをつくる新しい公／私空間の構築」

研究開発領域

「 ト라우マへの気づきを高める

“人 - 地域 - 社会” によるケアシステムの構築 」

研究代表者氏名 大岡 由佳
武庫川女子大学短期大学部 准教授

目次

1. 研究開発プロジェクト名	2
2. 研究開発実施の具体的内容	2
2-1. 研究開発目標	2
2-2. 中間達成目標	3
2-3. 実施内容・結果	4
2-4. 会議等の活動	17
3. 研究開発成果の活用・展開に向けた状況	18
4. 研究開発実施体制	18
5. 研究開発実施者	24
6. 研究開発成果の発表・発信状況、アウトリーチ活動等	27
6-1. シンポジウム等	27
6-2. 社会に向けた情報発信状況、アウトリーチ活動など	27
6-3. 論文発表	29
6-4. 口頭発表（国際学会発表及び主要な国内学会発表）	29
6-5. 新聞／TV報道・投稿、受賞等	31
6-6. 知財出願	31

1. 研究開発プロジェクト名

「トラウマへの気づきを高める “人 - 地域 - 社会”によるケアシステムの構築」

2. 研究開発実施の具体的内容

2-1. 研究開発目標

【達成しようとする目標】

TIC（トラウマインフォームドなケア）の概念を土台に、バーチャル実践、地域実践、医療実践を行うことにより、人や地域、そして社会を変えていくことに目標に置く。具体的な目標は以下の通り。

1) バーチャル（WEB）実践

グループ名：公私をつなぐバーチャル・ワンストップ支援センターグループ（公私をつなぐバーチャルG）

- ・ワンストップ支援センター調査により性暴力被害者支援の現状把握および包括的行政関与の必要性を提言
- ・メール相談の実施により、ネット空間から現実世界の支援につなげるノウハウ蓄積
- ・WEB実践の有効活用・普及の手立ての提案

[成果の受け手]

- ・実際に性暴力被害にあった当事者；様々な情報から自身に必要な情報を選択し相談に至ることができる。
- ・被害者支援を行う支援者ならびに地方公共団体の施策担当者；最新の情報を相互に交換できる。

[活動目標]

「バーチャル・ワンストップ支援センター」の評価数値＝アクセス数と分布が評価指標となる。（数値目標：年間10000カウント）

2) 地域実践

グループ名：潜在的な子ども被害・学校対応グループ（潜在的な子ども被害・学校対応G）

教職員の対応研修グループ（教職員の対応研修G）

S D o H (Social Determinants of Health※) 地域資源連携グループ

(S D o H地域資源連携G)

- ・学校における潜在的な子ども被害実態の明確化とその対応方法の確立
- ・教職員および地域で子どもにかかわる大人への性暴力被害の早期発見・早期対応（二次予防）
- ・女性支援に関わる地域社会資源の連携システム（SDoH）構築

※SDoH(Social Determinants of Health)とは、健康の社会的決定要因を指し、ここでは女性の健康状態を規定する経済的、社会的条件を考える支援体系を指す。

[成果の受け手]

- ・教職員（養護教諭など）；学校で不適応を起こした子どもたちの理解につながる。子ども；学校でトラウマを有した子どもたちが支援につながりやすくなる。
- ・地域の行政支援機関等；虐待やDV、発達障害や依存症などトラウマや生きづらさを抱えた女性が適切な支援を受けることで、若年妊娠を繰り返したり虐待のハイリスクの環境のまま出産するケースを未然に防ぐことで虐待の連鎖を防ぎ、支援にかかる負担が軽減される。

[活動目標]

- ・学校教師の研修実施 年3回開催
- ・学校及び地域の子供が集まる施設、養護施設等での研修（年5-6回）
- ・学校における性被害対応ガイドライン作成・提言

- ・社会資源連携会議を初回以降4ヶ月ごとに開催

3) 医療実践

グループ名：病院のソーシャルワーク機能拡充グループ（病院のSW機能拡充G）
病院でのフィールドワークグループ（病院でのフィールドワークG）
性暴力被害者支援医療マニュアルグループ（性暴力被害者支援医療マニュアルG）

- ・病院での社会的孤立女性に対するソーシャルワークの実態解明
- ・女性支援SWチーム養成講座の確立と全国展開
- ・性暴力被害者支援医療マニュアル作成
- ・急性期高度救急医療を担う総合病院におけるトラウマに配慮したケア

[成果の受け手]

- ・総合病院産婦人科に受診した社会的孤立女性；エンパワメントされて支援を受けやすくなり、より社会的な健康を得て次世代育成への準備が可能となる。
- ・医療者；適切な対応のヒントが得られ、結果的に疾病治療にも専念しやすくなる。
- ・司法執行機関；改正刑法や司法面接の知見も盛り込んだ日本で初の対応マニュアルの作成によりトラウマに配慮した急性期対応がしやすくなる。
- ・医療現場でのトラウマ体験をもつ患者とその家族、対応した医療従事者；トラウマ体験を表出することにより心理・生活面に配慮した医療を提供することができ、病院に対する信頼感が醸成される。その結果、医療スタッフのメンタルストレスも軽減できることを目的とする。

[活動目標]

- ・産婦人科医、助産師、看護師、医療ソーシャルワーカーなどの専門職を対象としたソーシャルワークチーム養成講座をシリーズ開催
- ・ソーシャルワークチーム養成に至る過程の教科書化、DVD化→日本ヘルスプロモーションホスピタル連盟でのコンテンツ共有による病院への展開、日本プライマリケア連合学会や女性保険医療セミナーでのコンテンツ共有によるクリニックへの展開、性暴力被害者支援の医療機関対象講座での利用など
- ・ソーシャルワークチーム機能による医療者負担の変化に関する質的分析
- ・医療スタッフに対するアンケート調査、患者とその家族へのナラティブな聞き取り

4) トラウマインフォームドな視点の共有

グループ名：トラウマインフォームド（TIC）研修グループ（トラウマインフォームド（TIC）研修G）

- ・TICの海外技術知見の普及
- ・TIC研修の実施と効果の検証

[成果の受け手]

- ・全グループ研究の土台となる技術の開発・普及を目指す。
- ・対人援助職（MSW、PSW等）；TIC対応ができるようになることで、支援がスムーズに行える。
- ・当事者；周囲の支援者が適切な対応をすることで、二次被害が軽減される。

[活動目標]

- ・TIC研修、研修（前後）評価の実施（年2回）

2-2. 中間達成目標

プロジェクトの中間達成目標として、それぞれの実践の中で実態把握から始めていき、実装に備える。

研究開始から一年半で、PJ全体としては、TIC（トラウマインフォームドケア）の概念を中心に、兵庫と京都の各グループにて、表し方やアプローチは様々であるが、その対象に応じてトラウマの影響を伝え、その対応策を考えていく実践に応用していった。ワークショップや講座等を兵庫・京都の実践交流の場だけでなく、仲PJ（子どもへの聞き取り方）や石

塚 PJ（えんたく手法）の方略も組み込んでいくことで、TIC が多面的な切り口で展開できた。

1)バーチャル（WEB）実践

- ・全国のワンストップ支援センター調査実施とその地域特性分析
- ・バーチャルからリアルへつなぐ仕組みを模索し、WEB の整備
- ・メール相談、カード配布、市民講座、各地（特に郡部）でのワークショップ等の実施（各地域で 1 回）。SDoH 地域資源連携グループも講座に参加することによって実践内容を京都に還元することができた。

2)地域実践

[潜在的な子ども被害・学校対応 G]

- ・学校子ども被害に絡む TIC 教員研修を中学校で行い、教員の子どもに対する公・私の情報量の隔たり（「公（トラウマが見えない）」と「私（トラウマに気づける）」の隔たり）を確認した。

[教職員の対応研修 G]

- ・ワークショップ（ひょうご性教育研究会と合同）研修の実施および学校や地域での研修による実践、他 PJ や研究会と交流した。

[SDoH 地域資源連携 G]

- ・Social Determinant of Health の諸項目を改善する可能性がある、京都市内で利用できる社会資源をできるだけ多く調査し、地域社会資源をまとめている。

3)医療実践

[病院の SW 機能拡充 G]

- ・病院での社会的孤立女性に対するソーシャルワークの実態解明。アンケート調査を実施し、各職種が孤立状態を認識するものどうして良いかわからないでいる様子が明らかになった。

- ・虐待、DV、特定妊婦支援に関わる MSW へのインタビュー調査の実施。トラウマインフォームドな組織づくりが SW 機能拡充への鍵であることが示唆された。

[性暴力被害者支援医療マニュアル G]

- ・ワーキンググループメンバー決定の上、マニュアル内容のワーキンググループ開催、マニュアル完成した。

[病院 TIC 実践：京都 G]

- ・トラウマインフォームド・ソーシャルワークチーム養成カリキュラムの項目設定

[病院 TIC 実践：兵庫 G]

- ・医療現場における DV 産科調査の実施

- ・アート、音楽、ヨガ等からなる TIC プログラム「Painting Story」を企画し、対象となる患者や家族、医療スタッフを対象にトライアルを行う。海外よりスーパーバイザーを招き、「アートによるトラウマヒーリング」の講演を病院内で開催し、院内で広報した。

4) トライマインフォームドな視点の共有

[トライマインフォームド（TIC）研修 G]

- ・TIC のエビデンスのある海外技術研修をジョージタウン大学の協力を得て実施した。研修後は自機関における研修実施が可能となるため、それらの研修効果を測定する。

- ・小児科等の専門家の研修の実施（2 回）

- ・コミュニティを巻き込んだステイクホルダーの TIC 視点共有、アドバイザーの仕組みの導入を検討した。

2-3. 実施内容・結果

(1) 各実施内容

今年度の到達点① [バーチャル・ワンストップ支援センターグループ]

性暴力被害者支援（一次～三次予防）における ICT の可能性をプレゼンテーションする

実施項目：

- ①-1. 「バーチャル・ワンストップ支援センター」リーフレットと子ども向けカードを配布
- ①-2. 地域実践としての市民講座
- ①-3. 連携強化会議

実施内容：

一次予防：「リアル」と「バーチャル」を結ぶツールとして、「バーチャル・ワンストップ支援センター」リーフレットおよびメール相談の広報カードを配布した（バーチャルワンストップセンターチラシ2019年1月1000枚印刷 ふちカード2018年6月2000枚、9月5000枚印刷 2020年1月追加発注5000枚）。

仲PJとの市民講座「地域における性教育～子どもへの性被害の現状をふまえて」を、今年度は県北部の豊岡市において開催（2019年4月13日45人参加）。隣接する鳥取県や京都府の性暴力被害者支援センターのスタッフや地域の民生児童委員、市議会議員もみられた（参加者の感想はバーチャルワンストップ支援センター<https://onestop-hyogo.com>にて紹介）。前回の姫路市での市民講座において理解しにくかったと思われた内容は丁寧に解説した結果、ポストテストで正答率が前回に比較し有意に上昇した(71.6%→81.6%)。

二次予防：2020年2月12日に兵庫県警において連携強化会議を開催し兵庫県における性暴力被害者支援の現状報告と各団体の支援状況、さらにバーチャル・ワンストップ支援センターの広報を行った（兵庫県警被害者支援室、兵庫県地域安全課、同男女家庭課、神戸市、西宮市、神戸地検、兵庫県弁護士会、兵庫県こころのケアセンター、犯罪被害者支援団体、DVや性暴力被害者へのカウンセリングを実施しているNPOや看護協会、臨床心理士会、医療ソーシャルワーカー協会など19機関参加）。

実施項目

- ①-4. 産科DV本調査、啓発ツールの開発

実施内容：

産科DV調査（461名対象）が2020年3月に終了し、現在データ解析中である。2018年に実施したワークショップ（京都大学、ウィメンズカウンセリング京都参加）をもとに、啓発ツール「マタニティマップ」（成果物）を開発し、尼崎総合医療センターの妊婦健診で用いる予定である。

実施項目：これまで実施した会議やコンテンツをウェブに収載し、ネットワークと成果を見える化する。

- ①-5. メール相談の実施と事例検討会
- ①-6. メール相談のユーザー評価
- ①-7. ワンストップ支援センター全国調査（インタビュー）データ収集と解析
- ①-8. バーチャルシステム開発

実施内容：

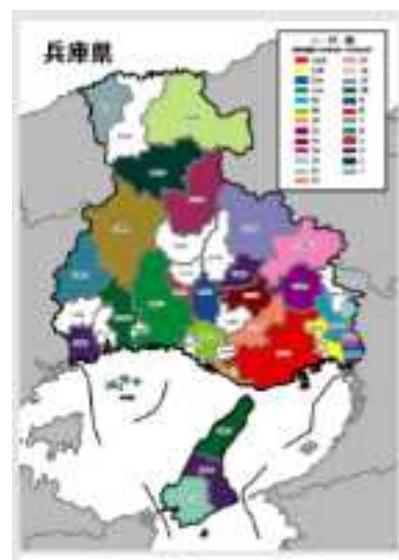
三次予防：メール相談はのべ46件（実人数26人）であった（2019年4月1日～2020年3月31日）。本人からの相談が73.1%、時間外・土日祝日の着信が78.3%と電話相談のつながらない時間帯にも自分のタイミングで相談できるという利点がある。居場所がない、不安すぎて眠れない、誰も助けてくれないといったメールならではの文面もあった。一方で、電話相談や面接相談につながったケースもあり、相談窓口としての役割を果たすことができ

た。

事例検討会は2回実施し、メールの特性を理解した対応について被害者支援に精通した臨床心理士よりスーパーバイズを受けた。

前年度（2018年度）にひきつづき全国のワンストップ支援センターにインタビューを行い（計24箇所：兵庫（2か所）・和歌山・京都・滋賀・佐賀・福岡・久留米・島根（2か所）・鳥取・高知・愛知・三重・福井・富山・東京・青森・北海道・静岡・千葉・栃木・仙台・沖縄）、被害者からのアクセス（相談経路、センターまでの距離、支援の実回数等）について調査を行った（本調査は前年度の繰り越しにより実施）。都市部と郡部では被害者数や支援機関数も異なるが、被害の開示のしやすさも地域特性があること、各都道府県に少なくとも1か所のワンストップ支援センターが設立されたが、いまだ運用はばらつきがあり手探りであることが明らかになった。

先進事例としてオーストラリア・ビクトリア州のメルボルンを中心に活動を行うワンストップ支援センター：MDC (Multi-disciplinary center) を視察した。州警察の担当者は「トラウマ理論をしっかり学んでから警察官の被害者に対する意識が変わった」と述べ、アドボカシーセンターであるSECASA (The South Eastern Centre Against Sexual Assault & Family Violence) と協働し、性被害が認知された（相談された）際の共通のスタンス (victim centered approach) に基づく手順書が確立されていることが明らかになった。またWeb実践としてSARA (Sexual Assault Report Anonymously) という匿名で通告でき、本人の承諾があれば警察に通報するというシステムが確立されている。



バーチャルシステムの開発：バーチャル・ワンストップ支援センターのアクセス数は2019年1月1日～12月31日：のべ2929回 8.0回／日 ユーザー数のべ2290人 前年度より減少している。バーチャル・ワンストップ支援センターのアクセス数を増やすため、どの地域から検索されているかを調査（マップ※成果物に拡大版あり）する。バーチャル・ワンストップ支援センターの全国展開として福岡県よりヒアリングをうけたが、予算的に今年度は導入できないとの回答があった。

今年度の到達点② [潜在的な子ども被害・学校対応グループ]

コミュニティ（尼崎市）の中で、子どもの傷つき（トラウマ）を有した、気になる潜在的な子どもの発見につながるための、多面的な研修を行い、その効果検証を行う。

実施項目②-1：教職員に対し、気になる子どもに適切に対応するための研修及び効果検証

実施内容：

・現場のニーズがあった性被害性加害の対応に向けて、尼崎市の小中高校の教諭（生徒指導担当）全体に向けた研修会を実施した。現場教員（小学校・中学校・高校）に加え、小児科医、精神科医、弁護士の協力を得て、バイオサイコソーシャルな視点から TIC 研修を行った。そのノウハウは、海外研修で得た知見も参考に行った。

実施項目②-2：定期的な学校へのアウトリーチ相談活動を通して TIC の概念の普及

実施内容：

- ・教育委員会の要請で、自殺事案があった学校のコンサルテーションに出向き、今後の対応について TIC 導入を含めた検討を行った。
- ・モデル校において、管理職とともに更なる TIC 概念の普及について検討を重ねた。

今年度の到達点③ [教職員の対応研修グループ]

ガイドライン作成に向けた準備を行う（ガイドライン完成は2020年）。

実施項目③-1：学校における性被害対応ガイドライン作り
にむけたワーキング開催

実施内容：

2019年3月にひきつづき、9月6日に土山希美枝氏(石塚PJ)をファシリテーターに「学校における性被害対応ガイドライン」ワーキングをえんたく会議の手法を用いて実施した。潜在的な子ども被害・学校対応G(毎原氏、岩切氏)およびSDoH地域資源連携G(周藤氏)の協力も得、尼崎市教育委員会、兵庫県警、こども家庭センター、弁護士、県内の小中学校教員、性暴力被害者支援NPO、マスコミなど35名が参加し、ガイドラインに盛り込むべき課題を共有した。えんたく会議参加者の中から執筆メンバーを選定し、4回のワーキング(1月30日、2月13日、2月21日、3月26日のべ52名参加)においてガイドライン内容を検討した。



2019年10月27日に、SDoH地域資源連携Gのウィメンズカウンセリング京都主催で「学校での性暴力対応はどうしたらいい？」をテーマに教職員の対応研修Gの実践報告とワークショップを開催した。参加者は多職種(学生や学校、医療、心理、被害者支援関係など)74名にのぼり、京都府内だけでなく、山形県、滋賀県、奈良県からも参加があった。ワークショップ形式を取り入れたことで、参加者同士が活発に意見交換をすることができた。アンケートでは「様々な立場の方の意見が聞けて大変勉強になった」という声が多く、多様な視点で関わることの意義を実感した。

今年度の到達点④ [SDoH地域資源連携グループ]

社会的孤立女性を支援できる社会資源の連携を進める。

実施項目④-1：地域資源連携支援会議の開催、SNS等を活用した支援システムの検討、学会での連携の課題の検討

実施内容：

- ・病院のSW機能拡充グループが音羽病院において実施した医療関係者を対象に社会的孤立女性におけるトラウマに気づく視点(=TIC)の導入を図るワークショップの企画・運営に参加した。
- ・京都市内にある社会的孤立女性を支援している社会的資源について引き続き調査し、その内容を整理し、リスト化に取り組んだ。
- ・病院のSW機能拡充グループと共に、医療機関における支援者を対象に、社会的孤立女性を地域の社会資源につなげることができるようなWebページKyoto Scopeの開発を行った。具体的には、これまで調査してきた社会資源リストの情報をどのようにサイトで公開するのかを検討した。Kyoto Scopeに情報を公開する際に、安全性を守る必要や支援につ

なかりにくい当事者の状況に配慮した情報の内容などについて当事者、関係者にヒアリングを行った。

・ **Kyoto Scope**では社会的孤立女性に対してTICの視点で対応し、適切な社会資源につなげる手法が学習できるようなモデルケースを提供予定であるが、医療機関や行政、その他（NPOを含む）各社会資源との相互連携の組合せにより、どのように支援が可能になるのか、個別の仮想ケースに即して検討する連携支援会議を行う方向性である。

・ 社会的孤立女性の典型的事例である性暴力被害者支援について、トラウマの理解に基づき行政や民間の関係機関が連携して支援する可能性を考えるために、京都性暴力被害者ワンストップ相談支援センターと医療機関を始めとした関係機関との連携の実践や課題について分析した研究ノートをまとめた他、学会でも発表し、議論した。

・ 教職員の対応研修グループと連携し、同グループが開催した学校における性被害対応ガイドライン作りにもむけたワーキングに参加したり、京都において学校関係者を対象に「学校での性被害対応はどうしたらいい？」というワークショップを開催して、ガイドラインについて京都や他の地域の学校関係者に関心を持ってもらうように試みた。

・ 内閣府男女共同参画局暴力対策推進室の担当者と面談し、性暴力被害者のためのワンストップ相談センターへの研修や情報提供の中に TIC の視点を導入する可能性を検討した。

今年度の到達点⑤ [病院のSW機能拡充グループ]／[病院TIC実践：京都グループ]

病院トラウマインフォームド・ソーシャルワークチーム養成講座を実施、実践、検証する

＊当初「病院でのフィールドワークグループ」としていたが、兵庫でも病院TIC実践を進めていくこととなったため、区別しやすいように名称変更した。

実施項目⑤-3： トラウマインフォームド・ソーシャルワークチーム養成講座実施、実践、検証

実施内容：

・ トラウマインフォームド・ソーシャルワークチーム養成講座(洛和会音羽病院)

洛和会音羽病院において行った病院全体アンケート、多職種対象インタビューをもとに、現状と課題を量的・質的に分析した。これを元に、どう病院にて多職種チームを形成し6時間にわたるワークショップを2回に分けて実施した。「産科における社会的孤立者支援システムの開発」を実現するために、「デザインスプリント」の手法を導入した。まず、2019年7月17日に「トラウマインフォームドケア」について学び、基本姿勢を共有した。さらに、典型的な仮想患者を想定した「カスタマージャーニーマップ」を作成し、産科における現状と課題を整理してメンバーで共有した。

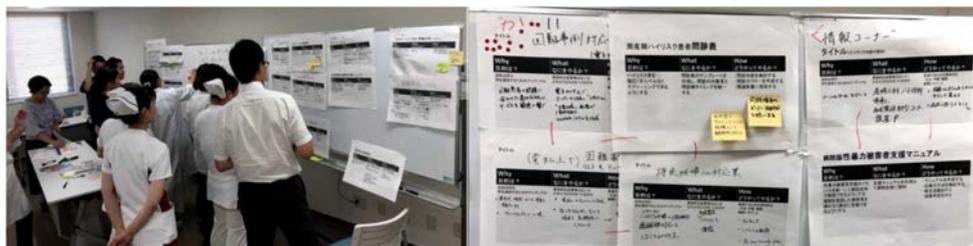


2019年9月3日の2日目はさらに目標を精緻化する作業を行った。「我々の成果物が目指

「究極の目標は何か？」という問いでブレインストーミングを行い、以下の目標が抽出された。

困った人が来たとき、患者さんもスタッフも困らない—ノウハウの標準化と、全体周知—

さらに、「解決すべき具体的課題」の抽出を行った。付箋を使ってアイデアを次々と出して行く作業の後、協議により要約を行い、解決すべき課題を抽出、続いて課題解決のための具体案をwhy-what-howフォーマットに沿って考案し、類似案を集約したのち「いいね」シールを用いて投票を行い優先順位や有効性の高い企画案を抽出した。



得票数第1位「困難事例対応テンプレート:チェックリストと情報共有スペースの作成」2位「トラウマインフォームドケア全体研修」3位「困難事例チーム・カンファレンス」について

院内の産科機能向上プロジェクトに上申した。

- ・トラウマインフォームドケア導入講座(専門職対象)

2019年5月17日に世界家庭医学会にて翌5月18日に日本プライマリケア連合学会にて、トラウマインフォームドケアにかかる現状と課題につきシンポジウムならびにワークショップを開催した。また、救急修練医対象トレーニングコースERアップデート、日本家族計画協会主催SRHセミナー、NPO) 女性医療ネットワーク年次総会、周産期医療コースフォーラムなど様々な場で、様々な医療者を対象にトラウマインフォームドケア導入レクチャーを開催した。

- ・WebツールKyoto Scopeの製作

病院職員にトラウマインフォームドなソーシャルワークやケアを導入するための、横展開可能なツールとして web ツール Kyoto Scope を製作した。 <https://kyoto-scope.com/> (4月11日現在、作成途中のものは下記参照 <https://kyoto-scope.com/wp/>)

Kyoto Scopeはつぎの2つの機能をもつ。1)モデルケースを通じて社会的孤立者に対する適切な対応を学べる。2)京都府下の地域資源を素早く検索できる。まずサイトのデザインそのものがトラウマインフォームドであるように細部まで注力した。またモデルケースには、対応の工夫と視点のほか、患者が抱えているトラウマや社会背景の理解、関連が推測されるACEs(逆境的小児期体験)などを項目立て、ケースを読むことでトラウマインフォームドケアの実際が学習しやすいように工夫した。モデルケースと関連づけて地域資源の情報にアクセスできるように構築しており、似たケースに対応している医療者が地域資源にすぐ電話できるよう、スマホ画面にも対応している。洛和会音羽病院のソーシャルワーカーにユーザビリティ調査をおこない、タグ機能などを追加した。

・そのほか、これまでの調査内容(インタビュー結果やアンケート結果など)を日本女性医学学会、日本心身医学関連学会などでポスター発表した。

今年度の到達点⑥【性暴力被害者支援医療マニュアルグループ】

それぞれのニーズに応じた機能別の性暴力被害者支援医療マニュアルを作成する。

実施項目⑥-2：性暴力被害者支援医療マニュアルの作成、印刷・配布、啓発・広報（研修）

実施内容：

性犯罪被害者の対応が必要な“医師・医療機関向け”版と、性暴力被害者に対応できる“関係各医会の代表者の意見を取り入れた医療機関向け”版のマニュアルの作成に取り組んだ。

今年度の到達点⑦ [病院TIC実践：兵庫グループ]

TICプログラムを病院全体へ浸透させ、コミュニティへの橋渡しを整備する

実施項目⑦-1：病院コミュニティにおけるトラウマフレームの導入

実施内容：

尼崎総合医療センターにおけるTICプログラム実施人数を以下に示す。

【これまでの参加人数】2018年6月—2020年3月のべ310人

	患者様 個人 のべ人数(実人数)	患者様 グループ のべ人数(回数)	医療スタッフ グループ のべ人数(回数)	総 のべ人数
アート	82人(36人)	60人(24回)	28人(4回)	170人
ヨガ	87人(40人)	24人(4回)	5人(1回)	116人
音楽	8人(5人)	16人(1回)	0人(0回)	24人

アートプログラムを重ねることで患者の体験や感情がほどけていく様子が作品に現れ、スタッフと共有することで患者の「トラウマ」「生きづらさ」を理解する手立てともなった。ヨガは単なる体操ではなく、ファシリテーターが患者の状態に合わせた個別のプログラムを行い、身体化されているDVや被害体験、自身の病気などの「トラウマ」について患者は促さなくとも語り始めた。

実施項目⑦-2：病院TIC実践の検証

実施内容：

トラウマアートの先駆的な試みを実践しているメルボルンのダックスセンターを視察し（5月2日）アートの教育的効果や評価指標について示唆を得た。

Trauma Informed Care @AGMC 報告会 6月26日（参加者21名）

2019年度と同様にメルボルンよりトラウマヒーリングを実践するDr. Kohを招聘し、TICプログラムへのスーパービジョンを実施した。TICプログラムを行う目的は「自分たちの苦しみをわかってほしい」トラウマ体験の表現と「安心していられる場をつくる」ことであり、従来の医療でカバーできない領域といえる。継続するためにどのように効果の評価するかについて話し合った。

実施項目⑦-3. 地域コミュニティへのトラウマフレームの導入

実施内容：

ワークショップ「トラウマとコミュニティケア」6月27日（参加者22名：産婦人科・精神科医師、神戸市こども家庭センター、弁護士、性暴力被害者支援センター・ひょうご、TICプログラムファシリテーター、医療通訳メンバー、リステックス京都チーム）大岡由佳氏のレクチャをうけた後、職種や活動現場ごとに「職場や活動とトラウマ」をテーマに話し合い各分野でTICの概念を広めていく足掛かりとなった。

ワークショップ「TICからみた DV被害者×コミュニティケア」：6月24日（参加者50人）ひょうごDV被害者支援連絡会（HYVIS）の主催で支援者を対象に開催された。Dr. Kohの「トラウマの理解と治癒」講義後、性暴力・DV被害の架空事例についてえんたく会議形式で

イスカッションを行った。参加者からは「トラウマケアはゆっくりと、丁寧にという言葉が腑に落ちた」「本気であれこれ一緒に悩んで困って少しでも楽になってもらえる方法を探る、という過程が大事」、またDVサバイバーからは「自分が歩んできた道をひとつひとつ振り返ることができた」との声が寄せられた。

地域と共にアートを通して、安心な医療空間作りを試みる耳原総合病院を視察：(6月25日)同日、耳原総合病院主催で開かれたDr. Kohによる「トラウマ(心的外傷)への理解とアートの可能性」をテーマにした講演会にも参加した。とくにホスピタルアートに関わる専門家は院内TICに関心を持ち、6月26日のTrauma Informed Care @AGMC 報告会にも参加し交流を深めた。

今年度の到達点⑧ [トラウマインフォームド (TIC) 研修グループ]

TIC の概念を、対人援助職向きに広げていく土台を作る。

実施項目⑧-1：海外 TIC 研修導入

実施内容：

昨年度実施したジョージタウン大学が開発した TI-MED の TIC 研修パッケージについて、日本の文化特性を踏まえた日本語版の TIC 冊子を作成した。

実施項目⑧-2：TIC の現場実践・検証

実施内容：

- ・海外の技術等を踏まえつつ、兵庫県尼崎総合医療センター等の組織に対して、TIC のステップアップ研修を行い、スタッフや組織に働きかけた。
- ・地域に存在するトラウマの問題をより深く理解する取り組みとして、「戦争とトラウマ」についての学識経験者を交えたワークショップを開催した。
- ・「精神医療のトラウマ」をキーワードに、地域の関係機関や当事者を巻き込み、アートによる TIC 実践を展開した。3 か所(明石、東大阪、宝塚、西宮、有馬)の 5 か所でワークショップを展開し、子どもや兄弟を亡くした人々や、虐待のサバイバー、精神障害者や知的障害者が参加して、人生の傷つき(トラウマ)を作品にした。

実施項目⑧-3：本邦に似合った TIC 実践の整理と TIC 概念の普及啓発

実施内容：

- ・PJ 内マネジメント会議にて、どのようにグループ研究の中に TIC の要素を入れ込み実践するかについて検討を進めた。
- ・医師(小児科・精神科・産婦人科・法医学)、ソーシャルワーカー、教育関係者、弁護士、民間支援機関等、多領域多職種の関係者でワーキングチームを発足し、TIC パンフレットを作成した。
- ・領域横断的な大規模な TIC に絡むシンポジウムを開催し、人々のトラウマの影響や対処の理解を普及する予定であったが、2019 年度は COVID-19 の影響につき延期となった。

(2) 成果

今年度の到達点① [バーチャル・ワンストップ支援センターグループ]

性暴力被害者支援(一次～三次予防)における ICT の可能性をプレゼンテーションする

実施項目

- ①-1. 「バーチャル・ワンストップ支援センター」リーフレットと子ども向けカードを配布

①-2. 地域実践としての市民講座

①-3. 連携強化会議

成果：

市民講座において、ただ視聴するだけでなく確認テストやロールプレイをすることでより知識が実践に使えるものとなり、さらに質疑応答の時間を多くとり参加者のコミュニケーションを促すことで地域における資源の掘り起こしやネットワーク形成にもつながった。市民講座はまた「バーチャルワンストップ支援センター」の広報ともなり、その後に当該地域からの相談が散見された。2017年から教職員対応研修Gが行ってきた「地域における性教育」を兵庫県医師会の学校保健委員会で紹介し、兵庫県医師会報に掲載された。連携強化会議におけるプレゼンテーションにより、兵庫県が「バーチャルワンストップ支援センター」の活用に前向きな姿勢を示した。

①-4. 産科DV本調査、啓発ツールの開発

成果：

産科DV調査はパイロットスタディを経て本調査を2018年2月より開始したが、パイロットスタディの結果は学会にて発表した。

①-5. メール相談の実施と事例検討会

①-6. メール相談のユーザー評価

①-7. ワンストップ支援センター全国調査（インタビュー）データ収集と解析

①-8. バーチャルシステム開発

成果：

メール相談：来年度はこの成果をもって尼崎市へメール相談事業の継続について検討してもらう予定である。当初予定していたユーザー評価は今の若い世代はメールよりもSNSになっていること、シェルターでは加害者からの安全確保のため携帯電話の持ち込みができないことから、実施には至っていない。

ワンストップ支援センター全国インタビュー調査では、兵庫県のように一つの県の中でも地域格差のある場所では、ウェブによる情報提供やネットワークについて関心が高かった。また県域を越えて相談者を紹介しているケースも散見され、広域連合のような枠組みでの電話相談やメール相談も効率的であると考えられた（いくつかの県は電話相談を民間団体へ外注している）。

バーチャルワンストップ支援センターのシステムは富山県と福岡県から実用に向けてヒアリングがなされ、仙台市も検討に前向きであった。しかし支援センターのホームページが県のものに組み込まれているところもあり、更新が頻回にできないことやセキュリティ、予算がネックとなって実現していない。

今年度の到達点② [潜在的な子ども被害・学校対応グループ]

コミュニティ（尼崎市）の中で、子どもの傷つき（トラウマ）を有した、気になる潜在的な子どもの発見につなげるための、多面的な研修を行い、その効果検証を行う。

実施項目②-1：教職員に対し、気になる子どもに適切に対応できるための研修及び効果検証

成果：

・尼崎市の小中高校の教諭（生徒指導担当）全体に向けた研修会を実施した。大阪教育大学の実施者の全面的な協力を得て、TIC研修内容の検討を行った。研修実施によるその効果検

証を TIC 研修の前後で行ったところ、性被害・性加害の子どもや保護者への対応ができる効力感が 1.5 倍～2.24 倍に増し、トラウマについての認識（トラウマの経験率／種類／脳・身体への反応／影響）も、有意に向上した。その結果については、論文投稿を行った。

・子どもの傷つきに敏感になるための TIC 概念導入について、学校で広めるとなると定期的な研修が欠かせないが、そのことを教育委員会や TIC に関心をもつ主要な教員等と協議した。

・市全体を変革するためには、教育委員会の全面的な協力と、TIC の研修講師等のための財政的バックアップがないと実現できないことが明らかになった。なお、海外渡米研修の結果は、3 月開催予定であった「第 7 回 学校危機メンタルサポートセンター・シンポジウム」で報告することになっていたが、COVID-19 の影響により中止となった。

実施項目②-2：定期的な学校へのアウトリーチ相談活動を通して TIC の概念の普及
成果：確実に TIC がモデル校には広がっていることが明らかになった。過去 3 か年にわたり TIC 研究実践を行った結果は、論文執筆しまとめた。なお、この定期的なアウトリーチ相談活動は、来年度も現場のニーズがあるため、精神科医および臨床心理士が継続的に行う予定である。

今年度の到達点③[教職員の対応研修グループ]

ガイドライン作成に向けた準備を行う（ガイドライン完成は2020年）。

実施項目③-1：学校における性被害対応ガイドライン作りにむけたワーキング開催
成果：

・えんたく会議では安心して発言できることが担保される点が重要であると感じた。2018 年度より 2 回のえんたく会議を経てガイドラインのワーキングに入ったことで、様々な立場の支援者が率直に意見交換をし、課題の共有ができた。それは孤立しがちな現場の支援者をエンパワーすることにつながったともいえる。新型コロナウイルスの影響で予定していたワーキングが延期しガイドラインの完成は 2020 年度になる。

・SDoH 地域資源連携 G との合同企画では、兵庫県だけでなくどこの地域でも学校における性被害が問題となっていること、ガイドラインのニーズが高いことが確信できた。当日のワークショップで取り組んだ課題「こんな時どうしたら Q&A」は、ガイドラインに収載する予定である。

今年度の到達点④ [SDoH地域資源連携グループ]

社会的孤立女性を支援できる社会資源の連携を進める。

実施項目④-1：地域資源連携支援会議の開催、SNS等を活用した支援システムの検討、学会での連携の課題の検討

成果：

・病院の SW 機能拡充グループとともに音羽病院において TIC のワークショップを実施したことで、医療機関において社会的孤立女性を理解する視点としての TIC 概念の有効性と同時に TIC の理解を広げるにあたっての課題も再確認することができた。

・京都市内にある社会的孤立女性を支援している社会的資源について調査した内容を整理し、リスト化に取り組んだ。医療関係者が社会的孤立女性を地域の社会資源につなげるにあたっての活用しやすさという観点から情報の整理を行った。

・病院の SW 機能拡充グループと共に、医療機関における支援者を対象に、社会的孤立女

性を地域の社会資源につなげることができるようなWebページKyoto Scopeの開発にあたって、社会資源リストの情報をどのようにサイトで公開するのかを検討した。当事者や関係者に行ったヒアリングを元に、Kyoto Scopeに情報を公開する際に、当事者や関係機関の安全性を守ったり、支援につながりにくい当事者の状況に配慮した公開の仕方について工夫した。

・Kyoto Scopeでは社会的孤立女性に対してTICの視点で対応し、適切な社会資源につなげる手法が学習できるようなモデルケースを提供予定であるが、医療機関や行政、その他（NPOを含む）各社会資源との相互連携の組合せにより、どのように支援が可能になるのか、個別の仮想ケースに即して検討する連携支援会議を行う方向性である。

・社会的孤立女性の典型的事例である性暴力被害者を行政や民間の関係機関が連携して支援するにあたっては、京都性暴力被害者ワンストップ相談支援センターと医療機関を始めとした関係機関との連携の実践や経験から分析した結果、トラウマへの理解を共有し、深める試みを幅広く継続して行うことが有効であることがみえてきた。

・京都において学校関係者を対象に「学校での性被害対応はどうしたらいい？」というワークショップを開催した結果、教職員の対応研修グループが作成している学校における性被害対応ガイドラインのようなマニュアルに対するニーズが高いことが明らかになった。Webなどで公開することで幅広い活用が可能ではないか。

・内閣府男女共同参画局の女性に対する暴力についてのHPでTICについての周知を行うことができた。また、性暴力被害者のためのワンストップ相談センターや関係機関に配布される事例報告書にTICの視点についてのコラムを掲載予定で、全国の性暴力被害者支援の現場にTICの視点を広げるきっかけになるのではないかと期待される。

今年度の到達点⑤ [病院のSW機能拡充グループ]／[病院TIC実践：京都グループ]

病院トラウマインフォームド・ソーシャルワークチーム養成講座を実施、実践、検証する実施項目⑤-3：トラウマインフォームド・ソーシャルワークチーム養成講座実施、実践、検証

成果：

・トラウマインフォームド・ソーシャルワークチーム養成講座(洛和会音羽病院)

洛和会音羽病院産科機能向上プロジェクトにて、ワークショップより挙げられた企画案が検討され、社会的孤立のチェックリストが作成された。電子カルテ内に専用ページが作られ、全妊婦に対して外来助産師がチェックし、情報を病棟やER、小児科病棟と共有している。産科病棟専従ソーシャルワーカーが配置され、外来の段階から関わるケースも生じている。病院における社会的孤立との対峙について、職員の全体的な意識が徐々に変わってきており、以前から一部で検討されていた助産師の家庭訪問事業について前向きに検討されている。

・トラウマインフォームドケア導入講座(専門職対象)

様々な職種の医療者にトラウマインフォームドケア導入講座を行ったことで、職歴の長い家庭医や助産師に特にニーズが高いことがわかった。社会的孤立者に大きな感情労働を伴うケアを実践してきた医療者には、そこにスポットライトが当たるだけで癒されるようであり、涙する人も複数いた。一方、職歴の浅い研修医などには、概念がケースと結びつきにくく理解しにくいようであった。

・Webツール Kyoto Scope の製作

製作にあたりクリエイティブデザイナー、地域のソーシャルワーカー、トラウマ研究者と議論を重ね、厳しいケースを掲載しつつ、読む人の心的負荷がかかりすぎない web ツールを作成した。グループ内のメンバーが随時更新、修正できる形となっており、SDoH 地域資源連携グループが主催するモデルケース検討会議などをもとに今後も内容を充実させる予定である。Web ツールについてすでに京都産婦人科医会、京都社会福祉協議会から後援を得ており、京都府、京都市についても後援に前向きなコメントをいただいている(COVID19のために対応が遅れている)。

今年度の到達点⑥ [性暴力被害者支援医療マニュアルグループ]

作成した性暴力被害者支援医療マニュアルを研修会等で配布啓発に努める。

実施項目⑥-2：性暴力被害者支援医療マニュアルの配布、啓発・広報（研修）

成果：

- ・完成した医療機関向けマニュアルは、協力医会である兵庫県産科婦人科学会と兵庫県泌尿器科医会のホームページにリンクを張ってもらい会員が参照出来るようにした。
- ・バーチャル性暴力被害者支援センターのホームページで一般公開できるマニュアルのトップページのリンクを張って、被害者含め医療機関の対応の基本姿勢などを知ってもらう機会を作る予定である（準備中）。
- ・性暴力被害者支援看護師養成研修会において、マニュアルの説明を行い紹介配布した。（2020年2月、東京）3月中旬に予定していた姫路市医師会館における医療者向け研修はCOVID-19の影響により中止となった。

今年度の到達点⑦ [病院TIC実践：兵庫グループ]

TICプログラムを病院全体へ浸透させ、コミュニティへの橋渡しを整備する

実施項目⑦-1：病院コミュニティにおけるトラウマフレームの導入

成果：

①-4「産科DV調査」でスクリーニングした「傷つきや不安を抱えた患者」や産後うつの患者に対してヨガやアートを行った際に医療スタッフには見せない感情を吐露することもあり、スタッフにとっては患者のより深い理解につながり、患者にとっては医療機関に対する信頼感を醸成した。産科スタッフに対しても毎月プレゼンテーションを行った結果、徐々に関心が集まり、患者にプログラムの案内をしてもらえるようになった。

実施項目⑦-2：病院TIC実践の検証

成果：

TICプログラムに関し、癒しの環境研究会、アートミーツケア学会、女性医学学会で発表し、2021年の周産期新生児学会シンポジウムに応募した。メルボルンでの研修から、効果測定はバイタルサインや心理テストによる数値的な変化以外にも、アートによって表現され、気づき、語られた患者の内面を「聴く側の」変化が重要であることを学んだ。その点において上記の学会発表では、終了後に会場から多くの質問や感想があがり、聴衆の反応も効果評価の一つであることが明確になった。

尼崎総合医療センター内で当該プログラムをRISTEX委託終了後も継続してもらえよう、病院幹部にプレゼンテーションを行い、2020年度末までのバックアップを取り付けた。しかしプログラムが現行の診療報酬にのらないこと（保険がきかない）、患者から料金をとって講師謝金との採算が合わないこと、有効性の評価（エビデンス）が今後の課題であ

る。

実施項目⑦-3：地域コミュニティへのトラウマフレームの導入

成果：

Dr. Kohによる2回のワークショップでは、いずれも自分たちの活動をトラウマインフォームドケアという視点から言語化し、さらにコミュニティケアへつながる学びへの動機づけができたといえる。なお、Dr. Koh招聘に関しては前年度繰り越しにても旅費および通訳に不足が生じたため予算増額を申請した。

今年度の到達点⑧ 【トラウマインフォームド (TIC) 研修グループ】

TIC の概念を、対人援助職向きに広げていく土台を作る。

実施項目⑧-1： 海外 TIC 研修導入

成果：日本語版の TIC 冊子『こころの器が壊れるとき』を作成した。実施者が監修する心理教育関連書『トラウマの伝え方』に掲載される予定。

実施項目⑧-2： TIC の現場実践・検証

成果：

- ・兵庫県尼崎総合医療センター、地域の子ども支援組

織 NPO、矯正管区等に、TIC の研修を行った。上記医療センターの研修実践については論文執筆を行った。

・地域に存在するトラウマの問題をより深く理解する取り組みとして、「戦争とトラウマ」についての学識経験者を交えたワークショップを開催し、2020 年度も招聘予定であったが、COVID-19 により見合わせとなった。

・TIC 実践として、精神障害者や子どもや兄弟を亡くした人々に人生のトラウマをアート作品にしてもらったワークショップを計 5 か所で総計 10 回開催した。アーティストの協力を得て行った。作品数は計 80 点ほどにのぼっており、2020 年度に展覧会（2020 年 9 月 18 日—22 日 於：ACTA 西宮）を企画している。また、この実践研究報告は、2020 年の日本精神保健福祉士学術集会、および、日本トラウマティックストレス学会にて学会発表予定である。

実施項目⑧-3：本邦に似合った TIC 実践の整理と TIC 概念の普及啓発

成果：

・TIC パンフレット「視点を変えよう！『困った人は、困っている人』」を作成した。リストテックスの HP で掲載して頂いた。

(<https://www.jst.go.jp/ristex/pp/information/000088.html>)。

・領域横断的な大規模な TIC に絡むシンポジウム開催を予定していたが、COVID-19 の影響につき延期となった。そのシンポジウム開催にあたり増額申請を承認してもらったこともあり、2020 年度に開催の見通しを検討はしているが、現時点では開催時期の見通しが立っておらず、研修ではない形の TIC 普及の方法も検討する必要がある。

・アディクション関係や法曹関係から、TIC 概念習得に向けての講演会等の依頼は受けており、領域横断的な TIC 普及は着実に 2020 年度も行っていく予定である。

こころの器が壊れるとき
—支援者のためのトラウマ体験・理解プログラム—



☐: 受けとめ
☐: つながり
☐: 笑いあう

事柄の意味を理解し感情を落ち着かせる
周囲との絆、つながりを見つけていく
穏やかに笑いあえる瞬間（日常）を取り戻す



2019年10月 24日	TIC会議	兵庫県立尼崎 総合医療セン ター	大岡PJ・TICシンポジウム開催に あたっての関係者ヒアリング
2019年10月 31日	戦略会議	丸ビル新館 500号	今後の大岡PJの方向性について リステックスより助言
2019年11月 27日	TICシンポジウ ム会議	ZOOM	大岡PJ・シンポジウム開催にあた つてのWEB会議

3. 研究開発成果の活用・展開に向けた状況

- ・バーチャル・ワンストップ支援センター <https://onestop-hyogo.com/> の運用。
- ・トラウマインフォームドケアの実践研究について論文発表。
- ・マタニティマップの作製・配布、医療機関（産婦人科）での活用。
- ・病院TICプログラムについて学会発表。
- ・社会的孤立女性を支援できるKyoto Scope（Web）の開発。
- ・TICパンフレットの作成とその普及。
- ・本PJ全体の研究開発について学術集会発表。

4. 研究開発実施体制

公私をつなぐバーチャル・ワンストップ支援センター グループ（公私をつなぐバーチャルG）（田口奈緒）

研究開発実施機関：

兵庫県立尼崎総合医療センター

実施項目：

- ①-1. 「バーチャル・ワンストップ支援センター」広報カードの作成
- ①-2. 地域実践としての市民講座
- ①-3. 連携強化会議
- ①-4. 産科DV調査・発表
- ①-5. メール相談実施と事例検討会
- ①-6. メール相談のユーザー評価
- ①-7. ワンストップ支援センター全国調査（インタビュー）
- ①-8. バーチャルシステム開発

グループの役割の説明：

- ①-3,5,6,7,8 当該グループの研究は、本プロジェクトの中心的取り組みとなる。ICTによる支援情報提供システムの整備だけではなく、支援の提供側のネットワーク構築を行う。

全国のワンストップ支援センターへのインタビュー調査を基に、地域特性にもとづいた連携のあり方をフィードバックする。（④SDoH地域資源連携グループと交流 実施項目：④-1）

- ①-1,2 作成した広報カードおよび②潜在的な子供被害対応グループのリーフレットを配布する機会として地域実践としての市民講座を開催する。

- ①-4については、2-1.[当該年度における研究開発の内容・進め方]と同様

潜在的な子ども被害・学校対応 グループ（毎原敏郎）

研究開発実施機関：

兵庫県立尼崎総合医療センター
武庫川女子大学短期大学部
大阪教育大学
徳島大学

実施項目：

②-1. 教職員に対し、気になる子どもに適切に対応できるための研修及び効果検証

グループの役割の説明：

H29 年度に作成した教職員用のパンフレット『問題行動の背景をトラウマの視点から考えてみよう』を用いて、尼崎というコミュニティで TIC の教職員研修を進める。また、「教職員の対応研修グループ」とも連携し、これらの学校 TIC の概念を他のコミュニティにも広げていく（実施項目：③-2）。さらに、「トラウマインフォームド研修 G」の協力を得て、学校職員の TIC 理解がどれほど進んだかについての効果検証も進めていく（実施項目：⑧-2）。

実施項目：

②-2. 定期的な学校へのアウトリーチ相談活動を通して TIC の概念を普及させていく。

グループの役割の説明：

子どものトラウマに対する学校現場の理解を促進し、再トラウマを受けないように、また、トラウマを負っていた際の早期発見・早期対応（2次予防）を目指す。「トラウマインフォームド研修 G」とも連携しながら、TIC の概念普及に取り組む（実施項目：⑧-2）。

教職員の対応研修 グループ（田口奈緒）

研究開発実施機関：

兵庫県立尼崎総合医療センター

実施項目：

③-1. 研修内容の検証のためのワークショップ(2回)

グループの役割の説明：

学校における性被害対応ガイドライン作成について、「SDoH地域資源連携 グループ」や、「潜在的な子ども被害・学校対応 G」の実施者である精神科医や小児科医、ソーシャルワーカー、加えて、「トラウマインフォームド研修 G」の協力を得ながら、多機関（教育委員会、県警、こども家庭センター、教員、マスコミ、弁護士等）でガイドライン作成を行い、その中で有機的連携を図った。（実施項目：②-1、④-1、⑧-3）

SDoH地域資源連携 グループ（周藤由美子）

研究開発実施機関：

ウィメンズカウンセリング京都

実施項目：

④-1. 地域資源連結会議の開催、HP の検討、SNS等を活用した支援システムの検討、学会での連携の課題の検討

グループの役割の説明：

病院TIC実践：京都グループが行うトラウマインフォームド・ソーシャルワークチームの実践の中で、SDoH地域資源連携グループが作成する連携ツールがソーシャルワークに生かされる（実施項目：⑤-3）。

公私をつなぐバーチャル・ワンストップ支援センターGの連携強化会議に参加し、連携のあり方について情報交換する（実施項目：①-3,6,8）。

病院のソーシャルワーク機能拡充Gの調査結果を参考にしながら、地域資源連結のあり方を検討する（実施項目：⑤-3）。

病院のソーシャルワーク機能拡充 グループ（病院のSW機能拡充G）（中山健夫）

研究開発実施機関：

京都大学

洛和会音羽病院

実施項目：

実施項目⑤-3： ト라우マインフォームド・ソーシャルワークチーム養成講座実施、実践、検証

グループの役割の説明：

実施項目⑤-1、⑤-2の成果をもとに、養成講座（ワークショップ）の達成目標を設定しデザインを組む。病院TIC実践：京都Gとともに、具体的な参加者の選定や時間割を設定する。

性暴力被害者支援マニュアルGのマニュアル成果物の普及に協力する（実施項目：⑥-2）。

TIC研修GのTIC研修をトラウマインフォームド・ソーシャルワークチーム養成講座にも取り入れている（実施項目：⑧⑦-2）。

SDoH地域資源連携Gの専門的知見を養成講座（ワークショップ）に組み入れる。TICの共通認識の上に地域資源連携が成り立つように、情報の出し方を工夫する（実施項目：④⑥-1）。

性暴力被害者支援医療マニュアル グループ（主田英之）

研究開発実施機関：

徳島大学

兵庫県立尼崎総合医療センター

実施項目：

⑥-2. 性暴力被害者支援医療マニュアルの配布、啓発・広報（研修）

グループの役割の説明：

公私をつなぐバーチャル・ワンストップ支援センターGと連携している医療機関で成果物を共有する。（実施項目：①-2）

また病院のソーシャルワーク機能拡充Gが作成するトラウマインフォームド・ソーシャルワークチーム養成講座の中で本グループの成果物も活用する（実施項目：⑤

ー2)。

病院TIC実践：京都グループ（矢野阿寿加）

研究開発実施機関：

京都大学
洛和会音羽病院

実施項目：

実施項目⑤ー3： トラウマインフォームド・ソーシャルワークチーム養成講座実施、実践、検証

グループの役割の説明：

トラウマインフォームド・ソーシャルワークチーム養成講座の試験的運用、評価を行う。

トラウマインフォームド・ソーシャルワークチーム養成講座の中では、TIC研修Gで学ぶTI-MEDを組み入れる（実施項目：⑧ー1）。

病院TIC実践：兵庫グループとは定期的に情報交換を行う。

トラウマインフォームド・ソーシャルワークチームの実践の中で、SDoH地域資源連携Gが作成する連絡リストやSNSグループなどの連携ツールがソーシャルワークに生かされる（実施項目：④ー1、⑥ー2）。

病院TIC実践：兵庫グループ（田口奈緒）

研究開発実施機関：

兵庫県立尼崎総合医療センター

実施項目

⑦ー2. 病院TIC実践の検証

グループの役割の説明：

⑦ー1 が妥当であるかどうか海外よりトラウマヒーリングを実践するコウ博士を招聘し、院内でワークショップを行い TIC プログラムのスーパーバイズをもらう。その際に、TIC 研修 G にも参加してもらい、TIC が概念の整理（実施項目：⑧ー3）に役立ててもらった。

実施項目：

実施項目⑦ー3. 地域コミュニティへのトラウマフレームの導入

グループの役割の説明：

「潜在的な子ども被害・学校対応 G」や、「トラウマインフォームド研修 G」の実施者にも関わってもらうことで、地域の実践を包括的に進めるきっかけづくりに寄与した（実施項目：②ー1、⑧ー3）。

トラウマインフォームド（TIC）研修 グループ（大岡由佳）

研究開発実施機関：

武庫川女子大学短期大学部
兵庫県立尼崎総合医療センター
久留米大学医学部

実施項目：

⑧-1. 海外TIC研修導入

グループの役割の説明：

当該グループの研究は、本プロジェクトの多様な取り組みの基盤に位置する概念形成に関するものである。従来行われてきた治療等を中心とするトラウマケアとは異なり、多様な機関で、どのような人にも活用できる概念となっている。大岡PJのすべてのグループ研究を進める上で、支援の基盤と位置づけられることを目指してTIC研修パッケージの導入をはかった。

実施項目：

⑧-2. TICの現場実践・検証

グループの役割の説明：

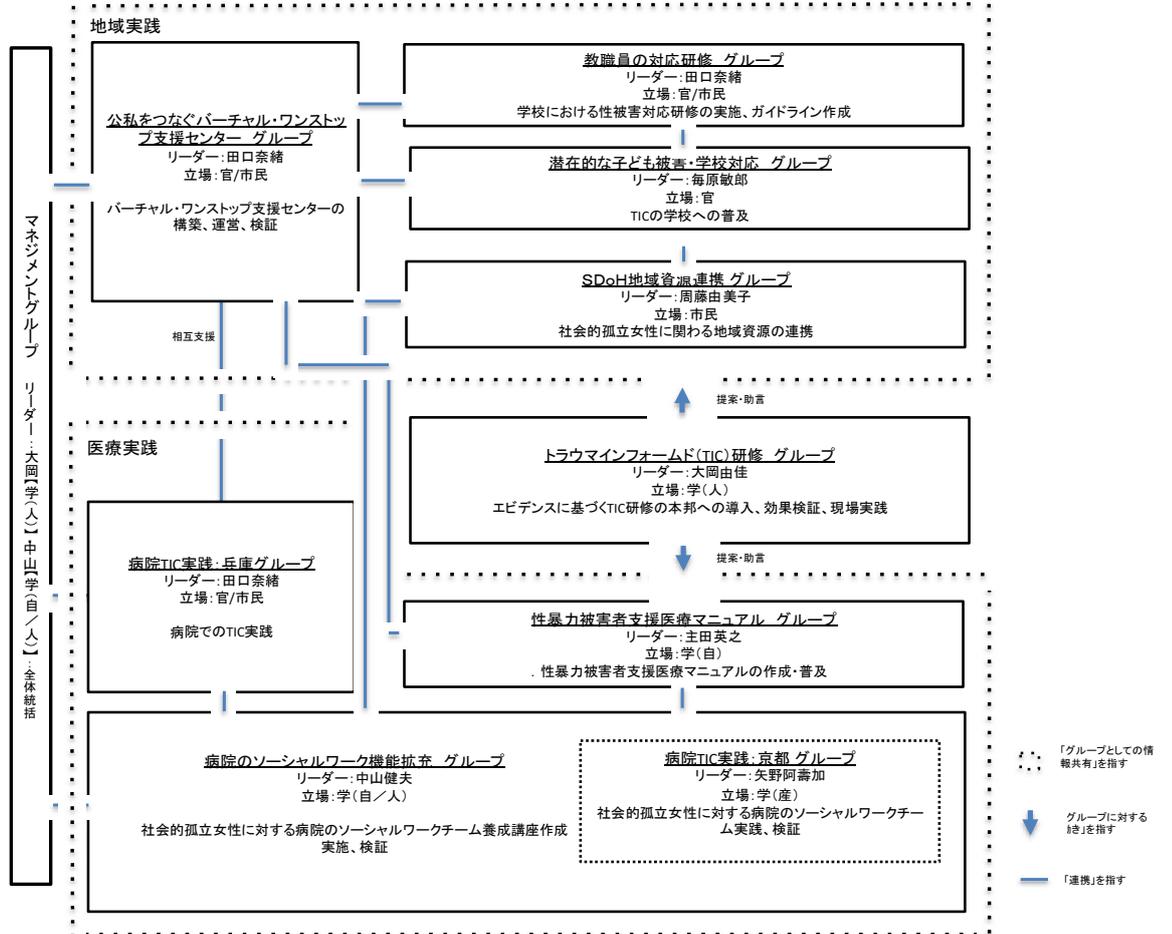
「潜在的な子ども被害・学校対応G」と共に中学校にてTIC概念の普及実践・効果検証に寄与する（実施項目：②-1）。また、兵庫県尼崎総合医療センターの「病院TIC実践：兵庫G」とも連携し、兵庫県尼崎総合医療センターの職員に対してTICのフレーム導入の実践を行う（実施項目：⑦-1）。

実施項目：

実施項目⑧-3：本邦に似合ったTIC実践の整理とTIC概念の普及啓発

グループの役割の説明：

大岡PJのすべてのグループに呼びかけ、TIC概念の整理を行い、TICパンフレットを作成した。そのTIC概念を整理したパンフレットは、潜在的な子ども被害・学校対応Gのアウトリーチ教員研修での活用（実施項目：②-2）や、ウィメンズカウンセリング京都によるTIC普及活動の一環としても活用頂いた（実施項目：④-1）。今後、大岡PJ全体のシンポジウムでも活用予定としている。



5. 研究開発実施者

研究グループ名：マネジメントグループ

氏名	フリガナ	所属機関等	所属部署等	役職 (身分)
大岡由佳	オオオカ ユウカ	武庫川女子大学	短期大学部心理・ 人間関係学科	准教授
中山健夫	ナカヤマ タケオ	京都大学大学院	医学研究科	教授
田口 奈緒	タグチ ナオ	兵庫県立尼崎総合 医療センター	産婦人科	部長
池田裕美枝	イケダ ユミエ	京都大学	医学部付属病院 産科婦人科	特定研究員

研究グループ名：公私をつなぐバーチャル・ワンストップ・支援センター
病院 TIC 実践：兵庫グループ

氏名	フリガナ	所属機関等	所属部署等	役職 (身分)
田口奈緒	タグチ ナオ	兵庫県立尼崎総合 医療センター	産婦人科	部長
福岡ともみ	フクオカ トモミ	兵庫県立尼崎総合 医療センター	産婦人科	事務補助
井上千秋	イノウエ チアキ	いのうえ助産院	助産師	院長
荒木智子	アラキ トモコ	畿央大学	KAGUYAプロジェ クト	博士研究員

研究グループ名：教職員対応研修グループ

氏名	フリガナ	所属機関等	所属部署等	役職 (身分)
田口奈緒	タグチ ナオ	兵庫県立尼崎総合 医療センター	産婦人科	部長
福岡ともみ	フクオカ トモミ	兵庫県立尼崎総合 医療センター	産婦人科	事務補助

研究グループ名：潜在的な子ども被害・学校対応(教職員対応グループを含む)

氏名	フリガナ	所属機関等	所属部署等	役職 (身分)
毎原敏郎	マイハラ トシロウ	兵庫県立尼崎総合 医療センター	小児科	科長

大岡由佳	オオオカ ユウカ	武庫川女子大学	短期大学部心理・人間関係学科	准教授
浅井鈴子	アサイ レイコ	兵庫県立尼崎総合医療センター	小児科	相談員
岩切 昌宏	イワキリ マサヒロ	大阪教育大学	学校危機メンタルサポートセンター	准教授
瀧野 揚三	タキノ ヨウゾウ	大阪教育大学	学校危機メンタルサポートセンター	教授
中村 有吾	ナカムラ ユウゴ	徳島大学	保健管理・総合相談センター	助教

研究グループ名：性暴力被害者支援医療マニュアルの作成

氏名	フリガナ	所属機関等	所属部署等	役職(身分)
主田英之	ヌシダ ヒデユキ	徳島大学	法医学講座	准教授
田口奈緒	タグチ ナオ	兵庫県立尼崎総合医療センター	産婦人科	部長
福岡ともみ	フクオカ トモミ	兵庫県立尼崎総合医療センター	産婦人科	事務補助

研究グループ名：トラウマインフォームド (TIC) 研修

氏名	フリガナ	所属機関等	所属部署等	役職(身分)
大岡由佳	オオオカ ユウカ	武庫川女子大学	短期大学部心理・人間関係学科	准教授
井上美智子	イノウエ ミチコ	兵庫県立尼崎総合医療センター	小児科	相談員
大江美佐里	オオエ ミサリ	久留米大学医学部	神経精神医学講座	講師
石田哲也	イシダ テツヤ	久留米大学医学部	神経精神医学講座	助教
武藤恵美	ムトウ エミ	武庫川女子大学	短期大学部心理・人間関係学科	研究調整員

研究グループ名：病院のソーシャルワーク機能拡充グループ(病院でのフィールドワークグループを含む)

氏名	フリガナ	所属機関等	所属部署等	役職(身分)
中山健夫	ナカヤマタケオ	京都大学	健康情報学	教授
池田裕美枝	イケダユミエ	京都大学	健康情報学	大学院生
荒木智子	アラキトモコ	畿央大学	Kaguya プロジェクト	研究員

日吉和子	ヒヨシカズコ	同志社女子大学	看護学部	助教
小西由紀	コニシユキ	京都大学	健康情報学	研究員
中野慶子	ナカノケイコ	京都大学	健康情報学	大学院生
森下真理子	モリシタマリコ	京都大学	医学教育センター	大学院生
二宮清	ニノミヤキヨシ	洛和会音羽病院	理事	院長
野溝万史	ノミゾマリ	洛和会音羽病院	産婦人科	医長
清水一美	シミズカズミ	洛和会音羽病院	看護部	助産師
樺真紀子	ツバキマキコ	洛和会音羽病院	看護部	助産師
伊藤美幸	イトウミユキ	洛和会音羽病院	産婦人科腹腔鏡センター	センター長
仙石美香	センゴクミカ	洛和会音羽病院	看護部	外来看護師
矢野阿壽加	ヤノアスカ	洛和会音羽病院	理事	理事・産婦人科医
田中真友子	タナカマユコ	洛和会音羽病院	患者さま相談センター	相談員
日下智美	クサカトモミ	洛和会音羽病院	看護部	外来看護師
坪木奈緒美	ツボキナオミ	洛和会音羽病院	患者さま相談センター	相談員
西泊翔太	ニシドマリショウタ	洛和会音羽病院	ジュニアレジデント	ジュニアレジデント
久松いつみ	ヒサマツイツミ	洛和会音羽病院	ジュニアレジデント	ジュニアレジデント
橋本亮	ハシモトリョウ	洛和会音羽病院	ジュニアレジデント	ジュニアレジデント

研究グループ名：SDoH地域資源連携グループ

氏名	フリガナ	所属機関等	所属部署等	役職 (身分)
周藤由美子	ストウユミコ	ウィメンズカウンセリング京都	京都 SARA	スーパーバイザー
武森紫織	タケモリシオリ	ウィメンズカウンセリング京都	事務局	スタッフ
川上陽子	カワカミヨウコ	ウィメンズカウンセリング京都	事務局	スタッフ

6. 研究開発成果の発表・発信状況、アウトリーチ活動等

6-1. シンポジウム等

年月日	名称	場所	参加人数	概要
2019年 4月13日	市民講座「地域における性教育～子どもへの性被害の現状をふまえて」	豊岡市民プラザほっとステージ	45人	昨年度に県西部の姫路市で開催した市民講座を2019年度は県北部の豊岡市内で開催。仲プロジェクトの協力を得ながら、医療関係者、こども家庭センター、豊岡市教育委員会、学校関係者、民生委員・児童委員、警察、市議会議員など様々な立場の方が参加し、知見を深めた。
2019年 10月27日	ワークショップ「学校での性暴力対応はどうしたらいい？」	同志社女子大学今出川キャンパス	74人	京都、大阪、滋賀、奈良などの学校関係者、支援者などを対象に兵庫の教職員の対応研修グループの学校における性被害対応ガイドライン作りに関連したワークショップなどを行った。
2019年 5月17日	世界家庭医学会合同シンポジウム3 医療機関が実践する社会的孤立女性の支援—日本における現状と課題—	京都国際会議場	不詳(約100名)	諸外国の家庭医とともに、日本の社会的孤立女性の現状と、支援実践者の課題を共有した。
2019年 5月18日	日本プライマリケア連合学会インタレストグループ「困難事例に対するトラウマへの気づきを通じたアプローチ」	京都国際会議場	不詳(約50名)	プライマリケア連合学会員を対象に、トラウマインフォームドケアの導入レクチャーや、フェミニストカウンセリングのロールプレイなどを実施した。

6-2. 社会に向けた情報発信状況、アウトリーチ活動など

(1) 書籍・冊子等出版物、DVD等

・TICパンフレット『困った人は困っている人』武庫川女子大学精神保健福祉研究室

2020年1月末

・マタニティマップ 兵庫県立尼崎総合医療センター 2020年2月2月

・小冊子「こころの器が壊れるとき—支援者のためのトラウマ体験・理解プログラム—」

トラウマ体験・理解プログラムコアメンバーズ著(代表 久留米大学 大江美佐里) ,

2019年10月発行

(2) ウェブメディアの開設・運営

・内閣府男女共同参画局HP「女性に対する暴力の根絶→性犯罪・性暴力とは」「職務関係者の方へ」の原稿にてTICの視点を紹介

http://www.gender.go.jp/policy/no_violence/seibouryoku/index.html

・Kyoto Scope, <https://kyoto-scope.com> 2020年4月公開予定

(3) 学会(6-4.参照)以外のシンポジウム等への招聘講演実施等

- ・田口奈緒「いま必要な性教育とは 自分を大切にすること」ということ」第41回近畿学校保健連絡協議会 2019年7月25日 兵庫県民会館 けんみんホール
- ・田口奈緒 仙台(2019年10月18日仙台エルソーラ)、福岡(2019年11月1日福岡被害者支援センター)、香川(2019年12月15日オリブかがわ)での性暴力被害者対応研修会において全国ワンストップ支援センターインタビュー調査結果紹介
- ・池田裕美枝「ERでのトラウマインフォームドケア」臨床研修医向け救命救急・総合診療系セミナーERアップデート2019in沖縄 2019年7月5日 Royal Hotel 沖縄残波岬
- ・池田裕美枝「婦人科疾患の予防とプレコンセプションケア」第155回指導者のための否認と性感染症予防セミナー(SRHセミナー) 2019年6月22日 御茶ノ水ソラシティカンファレンスセンター
- ・池田 裕美枝「女性医療とリプロ」令和元年度周産期医療コースフォーラム 助産師に求められるウィメンズヘルス 神戸大学医学部神緑館多目的ホール
- ・大岡由佳「トラウマインフォームドケア(TIC)の視点から考える支援(対人援助技術の向上)」大阪矯正管区主催. 2019年6月7日 大阪合同庁舎.
- ・大岡由佳「TIC:トラウマインフォームドな視点から考える支援」みらいず主催. 2019年12月8日.梅田第2ビル.
- ・大岡由佳「トラウマインフォームドケアの視点からの関わり」令和元年女子受刑者の特性に応じた処遇プログラムに係る研修会. 大阪矯正管区主催. 2019年12月16日. 大阪矯正管区.
- ・大岡由佳「トラウマインフォームドケアってなに?」性暴力被害者支援センター・ひょうご主催. 2020年1月26日.兵庫県立尼崎総合医療センター.
- ・大岡由佳「トラウマインフォームドケア(TIC)の視点から考える支援」一般社団法人よりそいネットおおさか主催. 2020年12月19日. 大阪社会福祉会館.
- ・大江美佐里:子どものトラウマと心理教育. 令和元年度福岡県内判定課長及び心理相談員研究協議会(2020年1月24日 久留米市北筑後教育事務所2階会議室)
- ・大江美佐里:児童虐待の気づきと対応. 令和元年度 八女筑後地区学校保健会 合同研修会 (2019年11月8日 筑後市 筑後市北部交流センター「チクロス」ホール1・2)
- ・大江美佐里:被災後のこころのケア トラウマと悲嘆への対応. 令和元年度 災害・事故時のこころのケア対策事業専門研修(2019年11月7日北九州市 北九州市総合保健福祉センター アシスト21)
- ・大江美佐里:C-PTSDへのCBTマインドを持った治療実践. 2019年度発達障害・専門講座2 複雑性PTSDとその治療(公益財団法人明治安田こころの健康財団主催 講演2019年7月7日愛知県名古屋市長安田生命名古屋ビルホール)

- ・大江美佐里：複雑性PTSDに対する理解と対応．平成31年度長崎県高等学校・特別支援学校教育研究会学校保健部会佐世保支部講演会(2019年6月21日長崎県佐世保市 佐世保中央高等学校)

6-3. 論文発表

(1) 査読付き (1 件)

●国内誌 (1 件)

- ・大岡 由佳, 毎原 敏郎, 箕浦 洋子. 安全・安心なトラウマインフォームドな医療現場を目指して—看護師のメンタルヘルス調査の結果から—. 人間学研究32:21-29, 2020.

●国際誌 (0 件)

(2) 査読なし (9 件)

- ・田口奈緒「地域における性教育～子どもへの性被害の現状をふまえて」兵庫県医師会報No.777,2020.
- ・周藤由美子「性暴力というトラウマを抱えた女性を連携して支援するための方法と課題」フェミニストカウンセリング研究VOL.16,2019.
- ・大岡由佳, 池田裕美枝, 大江美佐里, 周藤由美子, 田口奈緒, 中山健夫, 主田英之, 毎原敏郎, 矢野阿壽加 "人-地域-社会"を結ぶトラウマインフォームドケアの実践. 精神保健福祉,51(1):83.2020.
- ・浅井鈴子, 岩切昌宏, 大岡由佳, 瀧野揚三, 中村有吾, 毎原敏郎. 学校におけるトラウマインフォームドケアの実践 (第I報) —中学校への介入研究の結果から—. 学校危機とメンタルケア. 第12巻:25-32, 2020.
- ・大岡由佳, 岩切昌宏, 瀧野揚三, 浅井鈴子, 毎原敏郎, 木村有里. 学校におけるトラウマインフォームドケアの実践 (第II報) —X市の教員全体を対象にした性被害・性加害研修の結果から—. 学校危機とメンタルケア. 第12巻,33-44,2020.
- ・大江美佐里：トラウマ・インフォームド・ケア 傷を理解して接する. 臨床心理学 20 (1):39-42, 2020
- ・大江美佐里, 小林雄大, 石田哲也, 千葉比呂美：ストレス関連症. 分子精神医学 19 (4):212-216, 2019
- ・大江美佐里：トラウマの診断・評価の現状と課題. こころの科学 208 (11):19-23, 2019
- ・大江美佐里, 千葉比呂美：STAIR-NTおよび関連治療技法が目指すもの. 杉山登志郎編：こころの科学増刊号 発達性トラウマ障害のすべて 84-89, 2019

6-4. 口頭発表 (国際学会発表及び主要な国内学会発表)

(1) 招待講演 (国内会議 0 件、国際会議 0 件)

(2) 口頭発表 (国内会議 11 件、国際会議 0 件)

- ・田口奈緒 (尼崎総合医療センター産婦人科) 「性暴力被害者支援センター全国インタビュー調査～病院拠点型は最適解か?～」第34回日本女性医学学会学術総会 ヒルトン福岡シーホーク2019年11月3日
- ・田口奈緒 (尼崎総合医療センター産婦人科) 「パートナーからの暴力 (IPV) と周産期

合併症の関連に関する調査（パイロットスタディ）」第140回近畿産科婦人科学会学術集会 ホテルグランヴィア大阪 2019年6月16日

- ・田口奈緒（尼崎総合医療センター産婦人科）「アートとヨガによるTIC（プログラム）」第17回癒しの環境研究会 全国大会（25周年記念大会） 日本医科大学 2019年11月10日
- ・田口奈緒（尼崎総合医療センター産婦人科）「トラウマインフォームドケア～トラウマが与える影響を可視化する～」アートミーツケア学会 近畿大学 2019年11月23日
- ・福岡ともみ（尼崎総合医療センター産婦人科）「ワンストップセンターインタビュー調査中間報告/オーストラリアのワンストップセンター報告」第18回NPO法人日本フェミニストカウンセリング全国学会東京大会分科会「性暴力被害者支援とトラウマインフォームドケア(TIC)」 ウィリング横浜 2019年5月26日
- ・周藤由美子（ウィメンズカウンセリング京都）「ワンストップセンターにおける機関連携とTIC」第18回NPO法人日本フェミニストカウンセリング全国学会東京大会分科会「性暴力被害者支援とトラウマインフォームドケア(TIC)」 ウィリング横浜 2019年5月26日
- ・周藤由美子（ウィメンズカウンセリング京都）「京都SARAにおけるトラウマケアとTIC」第18回日本トラウマティック・ストレス学会大会 シンポジウム「性暴力被害者支援について地域の関係機関への理解や連携の輪を広げるには」京都テルサ 2019年6月17日
- ・池田 裕美枝(京都大学大学院医学研究科健康情報学分野)「繰り返す人工妊娠中絶，社会的ハイリスク妊婦，被虐待，虐待加害は病院で認識・対応されているか <病院職員対象の質問紙調査>」第34回日本女性医学学会学術総会 ヒルトン福岡シーホーク2019年11月3日
- ・大岡由佳,大塚淳子,伊藤富士江「犯罪被害者支援の多機関連携調査の実態からみえてくるもの」「犯罪被害者の権利擁護とサポート」第18回日本トラウマティック・ストレス学会.京都テルサ.2019年6月16日.
- ・大岡由佳「"人・地域・社会"を結ぶトラウマインフォームドケアの実践。」第18回日本精神保健福祉士学会学術集会.名古屋国際会議場.2019年8月31日.
- ・大岡由佳「障害者施設職員のメンタルヘルス調査 からみる労働状況（2）ーいじめ・セクハラ・パワハラの実態に焦点をあてて」日本社会福祉学会.大分大学.2019年9月22日.

(3) ポスター発表（国内会議 3 件、国際会議 0 件）

- ・荒木智子（畿央大学）「高度医療機関におけるTrauma Informed Careプログラムの実践」第34回日本女性医学学会学術総会 ヒルトン福岡シーホーク 2019年11月3日
- ・池田裕美枝(京都大学大学院医学研究科健康情報学分野)「社会的孤立状態にある女性に対する病院ソーシャルワーカーの実践と課題」第34回日本女性医学学会学術総会 ヒルトン福岡シーホーク 2019年11月3日
- ・池田裕美枝(京都大学大学院医学研究科健康情報学分野) 第2回日本心身医学関連学会合同集会「病院職員による社会的孤立者との遭遇とその対応 ー病院職員対象の質問紙調査ー」大阪市中央公会堂 2019年11月17日

6-5. 新聞／TV報道・投稿、受賞等

(1) 新聞報道・投稿 (4 件)

- ・京都新聞、2019年10月28日、「上京、校内の性暴力テーマに講座 『被害を受けた子 負担かけない』という見出しで10月27日にSDoH地域資源連携グループのウィメンズカウンセリング京都が主催して兵庫の教職員の対応研修グループの福岡、田口が講師、ファシリテーターとして参加したワークショップが紹介された。
- ・毎日新聞/大阪、2020年3月18日、「ひとり人 包括的な性教育、目標に リスクと予防伝える 産婦人科医・池田裕美枝さん」社会的孤立の連鎖を断ち切るために包括的性教育が重要との認識から、性教育活動の他に研究にも従事していることを紹介された。
- ・朝日新聞、2019年9月4日、「(彼女の選択) 内科医から、27歳で転身 産婦人科医・池田裕美枝さん 女子組」女性が受ける社会的圧力からの心身の不調に取り組む産婦人科医として紹介された。
- ・MBS、2019年12月17日、「事故で兄を亡くした妹の複雑な思い 親を気遣い気持ちを押し込めるきょうだいへの支援「グリーンケア」」きょうだいを亡くした者にTICによるARTワークショップ(ファシリテーター:大岡由佳)を撮影され紹介された。
<https://www.mbs.jp/mint/news/2019/12/18/073941.shtml>

(2) 受賞 (0 件)

(3) その他 (0 件)

6-6. 知財出願

(1) 国内出願 (0 件)

(2) 海外出願 (0 件)